

2021.1
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

1 号

第43巻
No.378



アカマツ *Pinus densiflora* Sieb.et Zucc. (マツ科 *Pinaceae*)

生 薬 ロジン 松脂を蒸留した残りの不揮発性成分。工業的には松材のクラフトパルプの製造時にでるトール油を蒸留した時の残渣である。

成 分 樹脂酸：abietic acid, neoabietic acid, palustric acid, pimaric acid, isopimaric acid, dehydroabietic acid など。

効 能 絆創膏の粘着付与剤。紙のにじみ止め、粘接着剤、印刷インク、合成ゴム、塗料、ロジンバックなどに用いられる。



生薬 ロジン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



平安時代の年中行事に「子の日の小松引き」といって、正月初めの「子の日」に野山に出かけ小松を引き抜き、若菜を摘む行事が行われていました。常緑で冬でも青々と枝を延ばす松は岩山や尾根筋など、表土が浅い土地でも生育する生命力の強い逞しさと長命なことから、健康と長寿を願ったと考えられています。三十六歌仙の一人壬生忠岑（860－920頃）は「子の日する 野辺に小松の なかりせば 千代のためしに 何をひかまし」と若い松を引き抜く行事を詠んでいます。引き抜いた小松は持ち帰り、長寿祈願として飾ったのではと推測され、門松を飾る風習に発展したのではと考えられています。松は神聖な樹木で年神を家に迎える依り代として門の前に祀

られるようになったとも伝えられています。初めは松だけを飾ったもので、神を祀る、待つからマツの名がついたともいわれ、『本草和名』（918）に「和名 末都」、『倭名類聚抄』（931－937）に「和名 萬豆」とあります。平安時代後期の和歌集『堀河百首』（1104－1105）に「門松を いとなみたてゝ そのほどに 春明がたに 夜や成ぬらん 藤原顕季」の歌があり、この頃には門松を立てる風習があったことは明白です。竹や梅が加えられたのは室町時代以降とされています。「松竹梅」は慶事や吉祥のシンボルとして、特にお正月には欠かせないものになっていますが、こちらは中国宋（960－1279）時代に流行った画題「歳寒三友」が伝わったもので、寒い季節にりっぱに緑を茂らせる松と竹、花を咲かせる梅を指したもので、日本に伝わり縁起の良いものとして広まりました。特に松は日本の美術上重要な素材の一つで、平安、鎌倉時代の絵巻物、室町時代の能舞台や能衣装、江戸時代の襖絵、蒔絵、掛け軸など見事な美術品が残されています。

アカマツとクロマツはよく比較されます。アカマツは北海道南部から九州と朝鮮半島、中国東北部の山地または里山に自生または植栽され、樹齢が長く約200年から400年といわれます。樹高35m、幹回り1.5mの大木になり、樹皮は赤褐色で亀甲状の割れ目ができます。短枝の葉は2針葉、緑色でやや柔らかく、雌雄同株で雌毬花は楕円形、淡紫色で長枝の先に2－3個付き、その下部に楕円状の雄花を群生します。毬果は翌年の秋に成熟し、小さな毬果と熟した前年の毬果を同時に見ることができます。クロマツは本州以南九州と朝鮮南部の海岸に自生または植栽される常緑高木で、樹皮は暗黒色で亀甲状の割れ目があり、葉は2針葉、濃緑色で剛直です。雌毬花は球形、紫紅色で長枝の先に2－3個付き、その下部に卵状楕円形の雄花を咲かせます。日本に自生し、日本を代表する樹木と言っても過言ではなく、日本最古の歴史書『古事記』（712）や『出雲風土記』（733）の各郡山野の草木にも「松」が登場しています。『万葉集』（7C－8C）には長歌も含めて90首もの多くの歌が詠まれています。

薬としての松脂は『延喜式』（927）の典薬寮諸国進年料雑薬に美濃国の30斤をはじめてとして10ヶ国から計98斤（58.8kg）が献納され使われていました。『大和本草』（1709）に「松にも亦雌雄あり。雌松は其葉美なり。葉小く、木皮赤し。茯苓は雄松より生じ、松茸は雌松より生ず。西州（？）には雄松多き故、茯苓多し。雌松少きゆえに松茸まれなり。畿内には雌松多く、雄松少きゆえにまつたけ多く茯苓少しと云う」と、松は本来雌雄同株ですが、容姿や葉の硬さなどによりアカマツを雌松と言ひ、クロマツを雄松と言ひ、アカマツには松茸が、クロマツには茯苓が採れることが記されています。次いで『食物本草』（12－13C）を引用し「松花、一名松黄。味甘、温、無毒。心、肺を潤し、気を益し、風を除き、血を止める。又酒に醸すもよし。取払いて酒にて服す。又曰く白砂糖を米粉と和し、饅を作るもよし」と松の花粉についても述べています。

（村上守一 記）